

# 金子白夢牧師の禅思想

菅原 研州

## 一、はじめに

本論考は、自身プロテスタントの牧師でありながら、禅思想も学び、複数の著書を残した金子白夢牧師（一八七三〜一九五〇）について、研究するものである。<sup>(1)</sup>

本論では特に、金子師の『無門関の新研究』（青年通信社・一九四三年）を中心に、その禅思想の解明を行うものである。

## 二、『無門関の新研究』解題

金子師は『無門関』<sup>(2)</sup> 関連の著作を二度上梓している。

一つは、一九二七年（昭和二）に刊行された『無門関の研究（前篇）（以下、『研究』と略記）』で、本書は新生堂「東洋思想研究叢書」の第三篇と位置付けられている。そして、全四八則の本則を評唱・詠頌している『無門関』の前半二〇則を収録するのみである。

二つは、前書から一六年後の一九四三年に刊行された『無門関の新研究（以下、『新研究』と略記）』（青年通信社）であり、本書では全四八則分の解説を収録した。両書で重複する前半二〇則分について、有意味な違いは認められないため、『研究』に対して後半部分を付加し、『新研究』を刊行したということになる。

『研究』の「序文」から、本書成立の材料となったのは、大正一五年（一九二六）に、中京地方の「新生会同人——哲学研究の目的を以て組織された有志の精神的集団」<sup>(3)</sup> のために行われた講話であることが分かる。ただし、それが前半二〇則のみであったのか、四八則全てに対してであったのかは分からないけれども、『新研究』では「大正十五年」の下りが削除されているため、大正一五年の段階では前半のみだったと推定される。

そこで、本論では『新研究』を中心に検討するが、本書の目次は以下の通りである。

序文

前篇

緒論

無門関の自序

第一、趙州狗子Ⅱ絶対無の問題

第二、百丈野狐Ⅱ即実在の風流味

……〈中略〉

第二〇、大力量人Ⅱ創造的無の流れ（※『研究』はここまで）

## 後篇

第二一、雲門屎橛Ⅱ実在の活動

第二二、迦葉刹竿Ⅱ現実の大用

……〈中略〉

第四八、乾峯一路Ⅱ涅槃への一路

## 附録

第一、圓悟の宗教観

第二、此一関を超えて

第三、人と人、機と機

第四、宗教的感想の諸相

注視すべきは、各則の下にある言葉である。これは、金子師による各則への「著語」であり、基本はその語に従って各則が解釈されるため、各則読解の傾向を知ることが出来る。なお、この「著語」には、当時の思潮の影響が多分に見えるけれども、その一部については後述する。

## 三、本書執筆の態度

金子師の執筆態度は、『新研究』「序文」冒頭の一節に明らかである。

生命に活くる道。そこに我々の生活があらねばならぬ。我々は生活を価値あらしむべく真の我々の踏むべき道を見出さねばならぬ。<sup>(4)</sup>

師は、自らの生活が宗教的に価値のある、「真の踏むべき道」

を歩まねばならないと考えているが、それは最初期の著作である『体験の宗教』（一九二二年）以来、常に同様であって、師の宗教的理想であるといつて良い。具体的には以下の通りである。

私は長い間さうした道を求めて来た。私の長い宗教生活の歩みは、西に東に其の道をさがし歩いた。歐洲の中世紀に於ける聖者の歩んだ道、古印度の聖者の歩んだ道、ヘブルの古聖の歩んだ道、それらは凡て私の魂に慈光滴る尊いものを与へてくれた。私は永へに彼等古聖に対して感謝の讃歌を捧げやうとして居る。<sup>(5)</sup>

このように、師は洋の東西を問わずに自らの魂に慈光を与えた聖者が歩んだ道を讃嘆している。師にとって宗教書の研究は同時に、聖者の探求でもあった。本来はキリスト者であったはずの師が、何故東洋思想の中にも聖者を見出し得たかは、本書読解の上で鍵となるものといえる。

併しながらそれと共に私の宗教生活の過去の辿りに於て我を育て、私を導き、私を教へ、私の魂を深い体験の境地に携へてくれたものは支那に於ける幽玄な宗教上の神秘道を歩んだ純粋な東洋意識に生きた一群の聖者達の力であった。私はそれを謂ふ所の禅の流れを汲む一回の宗教人の人々のなかに見出した。今茲に私が世に送り出さうとして居る『無門関』の如きがその一つである。<sup>(6)</sup>

これは、師における『無門関』への讃辞であるといえよう。師は『無門関』に収録された各則に登場する禅者を、「一群の聖

者」であるとするが、その理由としては、師個人がこの『無門関』を通して自らの宗教生活を深い体験の境地をもって送ることを可能にしたためであるという。また、師には、その時代らしいというべきだが、過度な物質偏重の文明に対し、否定的な態度が見える。そして、禅宗は別に「仏心宗」ともいうが、その禅宗が持つ精神性を尊重しながら、物質文明の濁流に押し流される当時の人々に対し、本書に親しむことで、各自が持つ魂を浄化させるべきだと考えたのである。

ただし、精神性を尊重する禅宗であったとしても、その内面性のみで完結することはなく、同時に日々の生活へも宗教的精神を展開していくため、『新研究』読解時には師が説く「宗教生活」にも重大な関心を払わねばならないといえる。

それから、師はキリスト教（プロテスタント）の立場から、一方的に仏教・禅などを批判することはない。

私の解釈は敢て古人の旧套を踏まなかつた。我々は最早斯うした古典研究を旧式的なやり方から解放せねばならぬ。<sup>(7)</sup>

この立場は既に『体験の宗教』にて打ち立てられたもので、師は、自らの宗教思想の立場については、特定の宗教・宗派に依拠すべきではないと考えている。その理由はまた、次項を含めて考察する。

#### 四、本書に影響を与えた研究者等について

本書執筆に当たって、金子師は以下の謝辞を呈している。

此の書の作成に関して私の平素最も私淑し敬意を表して居る紀平正美博士、西晋一郎博士、西田幾多郎博士の三先生に思想上に負ふ所の多かつた事を茲に改めて感謝の意を表して置きたい。<sup>(8)</sup>

なお、右は『研究』でも同文となっている。また、『研究』には、「謹んで此の小冊子を文学博士 西田幾多郎先生に捧ぐ」という一文も見えるため、西田幾多郎博士（一八七〇～一九四五）の影響は甚大である。実際に、「第一、趙州狗子『絶対無の問題』に象徴的だが、西田博士が用いた語彙を「著語」に用い、他にも「矛盾」「絶対」なども見え、またその著作を本文に多数引用している。

西晋一郎博士（一八七三～一九四三）は倫理学者である。本文中に引用文を見ることが出来る。

また、紀平正美博士（一八七四～一九四九）については、師の『体験の研究』「序」を執筆している関係からも明らかのように、多くの示唆を受けている。また、紀平『無門関解釈（以下、『解釈』と略記）』（岩波書店、大正七年）は、『新研究』「緒言」における「禅と言語」の問題を始め、随処にその引用・影響が見られ、『新研究』は思想的に『解釈』の祖述であるともいえる。

それから、当然に禅籍を読むわけであるから、禅僧からの影響についても注意すべきだが、同年代の禅僧からの影響は見る事が出来ず、むしろ「不立文字」の扱いをめぐるのは批判的でもある。

世の禪者が単なる「不立文字」に拘泥して文字の奥に無文字の真実在が輝いて居ることを知らず、言々句々これ光明なることを知らないのは実に悲しむべきである。<sup>(9)</sup>

ここから、本書が従来の禪宗が保持した見解に依拠しないで書かれた理由が分かる。つまり、禅僧は確かに「不立文字」とはいうが、それを表層的（或いは硬直的）に理解し、真の意義を持っていないことへの批判があつたのである。そして、理想的な禅僧として金子師がイメージしているのは、同時代の禪者<sup>(10)</sup>ではなく、道元禪師を始めとする古来の聖者であつた。

由来禪宗に於ては一切の概念的思想を押し去つて不立文字と云つて居る。「不立文字」と云ひながら文字を立して居る所、そこには不立文字に囚へられざる自由無碍の境地が既に現はれて居る。深く味つて見ると不立文字とは云ひながら言端語端其の俛が不立文字の姿と云はねばならない。これ道元が奇しくも「言語道断トハ一切ノ言語是レナリ」と云はれた所以であらう。そこには何等のこだはりのない、立不立に囚へられない境地がある。<sup>(11)</sup>

既に、『体験の宗教』以来、道元禪師の著作についての言及を続けている師は、「不立文字」の意義について、『正法眼蔵』「安居」巻から引用して自らの立場を強調している。

「安居」巻では、釈尊による「摩竭掩室<sup>(12)</sup>」について、真理は無言・無心によつて至るべきで、真理に対する言語的な表現は方便に過ぎず、掩室によつて無言説（つまりは言語道断）を貫こうと

したことが、釈尊の真意であると解釈する一群がいたとされる。確かに、世間で用いられる「言語道断」とは「言葉に言い表せない」ことを意味するが、右引用文に見えるように道元禪師は「一切の言語」をもつて「言語道断」とした。そこには道元禪師なりの言語観があつて、仏法の真実を至理（無言説）と方便（言説）とに分けることを、分別として批判したため、自ずと言語を否定する見解には立たなかつたのである。そして金子師は、道元禪師が禪宗の祖師でありながら、言語を否定しない態度を受容した。なお、師の言語を巡る問題は、別の機会に詳しく検討したいと思つているが、本書に見える言語観については、以下に簡単に考察したい。

## 五、本書における言語観

『無門関』は冒頭、著者である無門自身の序において、言語に關する重大な関門があることで知られている。

仏語心を宗と為し、無門を法門と為す。既に是れ無門、且く作麼生か透らん。豈に道うことを見ずや、「門從り入る者は、是れ家珍にあらず。縁從り得る者は、始終成壞す」と。恁麼の説話、大いに無風に浪を起こし、好肉に瘡を剋るに似たり。何に況んや言句に滞り、解会を覓むるをや。棒を掉ちて月を打ち、靴を隔てて痒りを爬くも、甚の交渉か有らん。<sup>(13)</sup>

無門の見解には言語に対する否定が見られ、同時に知的な解会による真実の把握をも否定している。しかし、無門自身は四八則

の公案を採り上げ、それに自らの言葉が付けたのである。一見すると矛盾する行いであるが、金子師はここに禅宗の言語観の要諦があると指摘している。

(引用者註・紀平正美) 博士の説に従へば「仏とは働きの当体を言ひ、語とは其の外的表現であり、心とは其等を挿入する所の主観の働きを言ふのである」。斯うした解釈によるとここに「仏語心」と云ふ「語」が「働き自らの外的表現」を意味するところのものであつて外的表現によつてのみ働き自らが客観的実現性を有つて来る訳である<sup>14)</sup>。

師は紀平の見解に依拠しながら、『無門関』「序」冒頭に見える「仏語心」に着目する。これは、禅籍では広く『楞伽經』の言葉として引用されるが、実際には馬祖道一(七〇九〜七八九)の言葉とされる<sup>15)</sup>。なお、紀平は『解釈』において、もし禅宗が「仏心」というだけに留まれば、主観的唯心論に、引いては独我論に陥るとするが、ここで「語」の一字を得たことにより、その問題を免れたと評価する。そして紀平は、『無門関』「第二〇則・大力量人」の解釈において禅における言語観を詳細に検討しているけれども、言語の役割について、活きた言語は相手の全精神の活動を喚起しつつ、一個人に留まらず全人類の歴史全体にまで関係しうる<sup>16)</sup>という。つまり、仏がただ働きに留まらず、世界に影響を与えるように「語」が機能するとされる。よつて、禅宗の標語たる不立文字は、単純な言語否定とは採られなくなる。

禅者が不立文字と云ふのは实在自体の外的表現が単なる文字

の表現を以ては如実にそれを言表することが不可能だと云ふことだけであつて、实在活動の外的表現其のものを否定したのではないのだ。世の所謂禅者が不立文字に囚へられて了つて文字を立することを以て禅の本質に矛盾することの如く思ふはそれこそ自家矛盾と云はねばならない。不立文字とは一一の文字のことを云ふのだ。否定のなかに肯定を見ない所に何処に禅機の澆瀨さがあらう。文字を否定し更に不立文字をも否定し尽くしてこそ不立文字の真の精神が生きて来るのではない<sup>17)</sup>。

結果として、金子師は不立文字の位置付けを右のように述べ、实在(仏、或いは真理)の外的表現が文字の表現のみでは行えないということをも、不立文字というべきであつて、転じて、一方的に文字のみを否定することは禅において「自家矛盾」であるという。そして、不立文字を「一一の文字」だとしていることに鑑みれば、本書における言語観には、道元禅師の「言語道断」の解釈や、『正法眼蔵』「仏教」「仏経」両巻の影響なども見ることが出来る。その結果、禅籍について講義することを可能にする「道」を、著者自らが拓いていく様子が分かる<sup>18)</sup>。

## 六、「宗教生活」について

金子師は日々の生活をただ漫然と行うのではなく、宗教的に価値の高い生活を求めている。その観点から『無門関』全四八則を検討すると、「七 趙州洗鉢」が注目される。

「七 趙州洗鉢」について師は、「現実裡の具体相」と著語している。本則の内容は左記の通りである（現在の一般的な訓読法とは異なるが、金子師の読み方を挙げる）。

#### 趙州洗鉢

趙州、因に僧問ふ『某甲、乍入叢林、乞ふ師指示せよ。』

州云く『喫粥了也未だしや。』僧云く『喫粥了也。』州云く『鉢盂を洗ひ去れ。』其の僧省あり。

〔無門曰く〕『趙州口を開いて胆を見る。心肝を露出す。者の僧、事を聞いて真ならずんば、鐘を喚んでもたと作す。』

〔頌に曰く〕『只分明に極むるがために、翻つて所得をして遅からしむ。』

早く知る灯はこれ火なることを、飯熟すること(19)已に多時。』

本則については、いわゆる叢林修行の基本を問答しているといえる。しかも、食事と、食事に用いた食器を洗ったかどうかを主題にしているため、いわば坐禅や読経といった特殊的な禅林修行ではなくて、まさしく日常の生活の延長上にある問答であることに注目したい。

この一則に対する金子師の註釈態度は以下の通りである。

宗教の極致は決して日常生活を離れたものではない。何か深遠な真理でなければ宗教でない。哲学や經典の六ヶしいものを読まねば宗教は解らないと思ふて居るのが間違ひ。宗教は

日毎毎の平凡な生活の中にあるのだ。「平常心是道」と云つたやうに日常生活を離れて道はない。<sup>(20)</sup>

宗教の極致の置き方は様々である。それこそ、仏説にせよ『聖書』にせよ、ブツダや預言者が行う「奇跡」などに、極致を見る場合もあるだろう。だが、金子師は日常生活にこそ極致を見出した。そして、自らの見解の傍証に「平常心是道」という禅語を用いている。この語は、先に挙げた馬祖道一の言葉であるともされ、直訳すれば、日常的な心のあり方がそのまま仏の道であることをいう。しかし、この「平常心」についても、その置き所は難解で、ここに禅者各自の修証観が問われるものでもある。

一体私共は此の我々に与へられた日常生活と云ふものは平凡な浅薄な誠につまらぬ日暮らしのやうに思ふて居るがそれが抑もの誤りだと思ふ。実はこれ程深いものはないのだ。「此の生」。それは神が我々に与へ給ふた無上の賜だ。「時」の流れ。そこに我々は生命の具体相を実現せねばならない。飯を喫する、茶を飲む、仕事をする、人と語る。さうした平凡事は神への礼讃であり、自己生命の表現だ。そこに光がなくてどうしやう。その外に別に道があるのではない。<sup>(21)</sup>

まず、金子師は自らの生命を「此の生」として絶対的に肯定し、それを神に与えられた無上の賜であるとしている。そして、この生に伴っている「時」に、生命の具体相を実現するわけだが、それが飯を喫し、茶を飲み、仕事（作務）を行うといった平凡事であるとする。一方でこの平凡事こそが神への礼讃であると

し、宗教的真理・実在から照らされる「光」を見ていくのである。この「光」は、日常生活に宗教的価値を見出したものだが、これが無条件で可能であることは出来ない。もし、無条件で可能であるとすれば、このような問答を特殊的に取り扱うことすら無用となるためである。日常を離れず平凡でありながら、しかし、宗教的価値を見出していくのである。

然るに我々の生活はさうした光を隠し、生命を浪費して、真の純聖な生活に生き得ない。そこにあやまちがある。今趙州の此の僧に対した叮嚀親切の導きは斯うした平凡道の真理を我々に教へて居る。価値の必然的実現がそこにある。純真の自由さがそこに流れて居る。<sup>(22)</sup>

金子師が、我々の生活に光を隠すのは、どのような状態を想定しているのだろうか。殊に師は、日々の生活を空虚に生きる事が問題であるとしている。では、充実していれば良いのかというと、そもそも空虚・充実という区分自体に問題があるように思われる。何故ならば、それらは我々の生活の中で日常的に揺れ動くためである。また、「純真の自由さ」にも着目せねばなるまい。この場合の自由とは、あらゆる障害の無い状態であり、本来の日常では感じ得ない心境である。だが、宗教的価値が我々の生活に現れる時に自由があるということがいえよう。この詳細は本則のみでは論じきれないため、次項でも重ねて見ていくこととしたい。そして、本則末尾の語を見てみたい。

平々坦々まるで春の野を行く感じのするよい則だ。意味深長

と云はずして意味深長だ。「飯を食ふ水を飲む」それだけのことだがそこに言ふに言はれぬ味がある。これこそ全く生きた公案。之に比べると禅宗幾百乃至幾千の公案も凡て閑葛藤に過ぎない。閑文字に過ぎない。提唱とか何とか云つて六ヶしいことをしやべる老師とか云ふ高い所にあがつて物を言ふ人間もちと慚死すべきである。人間の生きた道は生きた生活の外にはないのである。<sup>(23)</sup>

ここでは純真な自由が、「平々坦々まるで春の野を行く感じ」と言い換えられている。そして、否定されたのは、禪師家による提唱などである。難解なことを考えず、生きた生活を行うことに宗教的価値を見出しているといえよう。

師はこのように、この一則を全公案の中で最も価値の高いものだと評価する。なお、紀平『解釈』では、本則を極めて簡単なものであるとし、重視しない。これは、自ら哲学者・思想家を自認し、その思想的価値に重きを置く紀平と、宗教生活の価値に重きを置く金子師との立場の相違といえる。

## 七、「宗教上の神秘道」じつじつ

さて、「宗教生活」を評価する金子師は、宗教的な生活が日常の行為の中にあることを指摘している。その上で見ていきたいのが、『無門関』「十九 平常是道」である。師は本則に「超認識境」と著語している。

平常是道

南泉、因に趙州問ふ『如何なるか是れ道。』泉云く『平常心是れ道。』州曰く『還つて趣向すべきや否や。』泉云く『向はんと擬すれば即ち乖く。』州云く『擬せずんば争か是れ道なることを知らん。』泉云く『道は知にも属せず、不知にも属せず。知は是れ忘（岩波文庫本は「妄」、紀平『解釈』は「忘」）覚。不知は是れ無記。若し真に不擬の道に達せば、猶ほ太虚の廓然として洞豁なるが如し。豈に強いて是非すべけんや。』州、言下に頓悟す。

〔無門曰く〕『南泉、趙州に発問せられて直に得たり瓦解氷消。分疎不下なることを。趙州、饒ひ悟り去るも更に参すること三十年にして始めて得ん。』

〔頌に曰く〕『春に百花あり秋に月あり。夏に涼風あり冬に雪あり。』

若し閑事の心頭に挂くる無くんば便ち是れ人間の好時節<sup>(24)</sup>。』

既に、前項において、「平常心是道」の語が金子師自身によって用いられていることを見ているけれども、その語自体を参究するのが本則である。本則の著語は、「超認識境」であるが、本則の「平常心是道」については、金子師自身が「平素の心が其の儘道だ<sup>(25)</sup>」と訳される通り、我々自身の日常的な心のあり方が、そのまま道（真理）であることをいう。

しかし、その表現は容易ではない。既に、本則中にも「向はんと擬すれば即ち乖く」とあって、修行を含め、真理の表現を積極

的に行おうとする営み自体を否定し、また、「道は知にも属せず、不知にも属せず」ともあって、知性に基づく積極的理解も否定されている。そして、金子師は次のように評する。

由来絶対それ自らの姿は無とも言ひ得ない所のもの、神は一切であると共に一切で無い所のもの、道それ自らも矢張りそれだ。「向はんと擬する」その刹那其の真相を喪つて了<sup>(26)</sup>ふものだ。

ここで慎重に見ていかなければならないのは、いわゆる禅宗的な否定の言説について、金子師はそれを神を表現するものとも考えている。そして、禪が本来的に否定の言説で表現しようとした当の「道」と「神」について、『無門関』の「第四五、他是阿誰」<sup>(27)</sup>「他」としての絶対者」では、本則の「釈迦弥勒猶ほ是れ他の奴なり」に注目して、この「他」を「我ならぬ我、絶対者それ自らの姿、「父」としての神がその姿を他の相として自現したものであるまいか」<sup>(28)</sup>とあり、活動態としてある神の一樣相として捉えていると思われる。つまり、「仏語心」という三位の構造を用いれば、心（主観）は我ならぬ我であり、仏は父としての神がはたらきとしてあることを指し、語はこの場合、釈迦・弥勒というはたらきたる神の自現として解釈出来よう。このように、「仏語心」という三位は、その文脈によって様々に展開可能なものである。

さて、「平常心是道」については、本則末尾の語からも考えて見たい。

春夏秋冬、四季折り折りの其の儘が人間の本郷であり、道それ自らの具体的な実現だ。「道は近きにあり」で我々の现实生活それ自らの其の儘のなかに円かに現はれて居るのだ。それこそ「平常心是道」であり「日日これ好日」と云はねばならない。<sup>(29)</sup>

我々の現実が、道から見ればそれ自らの具体的な実現であるという。よって、平常心がそのまま道であるという意義が成立するという。また、「日日是好日」は、無門の頌古の結句に対しての言葉であるが、雲門宗の開祖・雲門文偃（八六四〜九四九）の言葉を用いており、毎日が幸せだという意味である。

これらから理解出来ることは、金子師が否定したのは分別だということである。一切の分別的思考を否定し、日常に徹して、そこに仏法（或いは神）のはたらきのままに生きることが、日常生活に宗教的価値を置くという師の理想の極致であると結論付けられる。また、師においては、本書を始め禅籍に対して行った解説・註釈は、「仏語心」の「語」の位置付けとして、宗教的価値を持つ日常生活を写すために存在しているといえる。

## 八、結論

金子師は、自らの神秘主義への関心を元に、東西の思想を研究した人である。特に東洋思想については、禅僧が持つ神秘性に着目して、研究を進めている。本論では師の『無門関』解説の中から、禅思想として注目されると思われる「宗教生活」と「宗教上

の神秘道」について考察した。

両方ともに共通していえることは、師は神秘（或いは、悟り・真理）を遠くに置くことなく、自らの人生に表現出来るものであると考えている。その点で、悟り（真理）を特殊化することがなかった馬祖下の禅風に共鳴したのは、当然であるといえる。

ただし、師は『無門関』の研究以前から道元禅師への研究を進めていることもあり、悟り（真理）の特殊化への否定は徹底されつつも、日々の生活の中に、宗教的価値の表現がなされることを求めている。具体的には分別の否定として現れる。

また、特殊な修行（坐禅や読経）については、全般的に否定されている。よって、「宗教生活」項で取り上げたように、「趙州洗鉢」話を評価し得たのは、「食事」と「洗鉢（食器を洗うこと）」という禅僧が日常生活自体を真つ正面から採り上げていることが、金子師自身の立場にも大いに共鳴した結果であったといえる。

なお、本論ではあくまでも金子師の著作に従って、師の見解を探るに留めているけれども、この時代、日本のキリスト教では、東西両洋の思想や宗教の交流が盛んに論じられたことが知られている。<sup>(30)</sup> その中で師の位置付けなどは、また機会を改めて考察したい。

注

(1) 金子白夢牧師への先行研究や伝記の一部については、拙論「金子白夢牧師『體驗の宗教』に見える道元禪師觀」(『愛知学院大学教養部紀要』第六三巻第一号、二〇一五年九月)及び「衛藤即応博士と金子白夢牧師」(『宗学研究紀要』第二八・二九合併号、二〇一六年三月)を参照願いたい。なお、伝記については未解明の部分も多いため、今後更なる研究を行う必要を感じている。また、金子師と禪宗については、以下の見解が知られている。

先生は東洋哲学を深く研究しておられ、禪宗もよく研究しておられましたので、そうした禪語がよく説教に出ました。先生の話は、論理的に進められるより、直観的に進められる場合も多いと思いました。先生は思想家であり、宗教家であるとともに、詩人でもあられたと思いました。

『百年のあゆみ』岡井弘氏の感想「二四頁  
※岡井氏は日本陶器(現・ノリタケ)の役員であり、アララギ派の歌人でもあった。

(2) 『無門関』とは、中国宋代に編集された禪宗の公案集である。南宋時代の臨済宗・無門慧開(一一八三〜一二六〇)が、古今の禪者が行った問答から四八則を選び、自ら簡単な示衆を付し、頌古を詠んだものである。日本には、由良興国寺開山で、無門の法嗣である心地寛心(臨済宗法灯派・一一〇七〜一二九八)がもたらしたとされ、それ以降急激に流行したという。なお、日本では『碧巖録』と並んで、中世から近世・近代にかけて、臨済宗・曹洞宗問わずに広く学ばれた。また、金子師は永年『無門関』を座右の書としていたことが知られる。

(3) 『新生会』について、以下の指摘がある。

一方東大の吉野作造博士を中心とする新人会の文化啓蒙活動は、地方各地にも波及し、当市に於ても文化運動の機運が盛り上りを見せていた。(中略)

この時に当り金子白夢は、小林橘川、与良松三郎、長野浪山、成瀬賢秀等の同志と計って、講座を中央食堂の階上に設け、毎水曜日の定例日とし、哲学、宗教、文芸について自ら講述した。講義終了後は、活発な質問応答の形式で終始した。

教育界に於ても当時八大教育思潮が花やかに提唱されており、新教育運動の機運が動き始めたこの頃若き教育者の中には、中央食堂の文化講座に出席して金子先生の指導を受けたものが中心となつて、先生を専任の講師と仰いで、教育者を中心とする研究会を毎週木曜日の夜開くこととなり、先生の快諾を得た。新生会と名づけられた。

『百年のあゆみ』二〇頁  
※吉野作造 東京帝国大学で教鞭を執り、大正デモクラシーの立役者として知られる思想家、政治学者。生没年は一八七八〜一九三三年。

※新人会 吉野の民本主義の影響を受け、東京帝国大学の学生が設立した学生運動団体。一九一八年(大正七)一二月に結成、一九二九年(昭和四)に解散。

※八大教育思潮 「八大教育主張」ともいい、一九二一年(大正一〇)八月に東京高等師範学校(現・筑波大学)において大日本學術協会が主催した講演会で、小原国芳など八人によって主張された教育思想のこと。

(4) 『新研究』「序文」一頁。

(5) 『新研究』「序文」一頁。

(6) 『新研究』「序文」一〜二頁。

- (7) 『新研究』「序文」二頁。
- (8) 『新研究』「序文」二頁。
- (9) 『新研究』「緒論」五〜六頁。
- (10) 金子師は南天棒こと鄧州全忠師（臨濟宗妙心寺派・一八三九〜一九二五年）に参じようとしたものの、「ヤソ禅」などとあしらわれる様子が、同師の語録に伝わる（『禅に生きる傑僧 南天棒』二〇五〜二〇七頁）。それに対する金子師の言動等は知られないが、同時代の禅者が実践的・教理的に硬直化していることを批判することに、その応答の一端を垣間見ることが出来る。
- (11) 『新研究』「緒論」五頁。
- (12) 『摩竭掩室』とは、マガダ（摩竭）国内のブツダガヤで成道した釈尊が、その後二二日間、自らの居室を閉じて無言のままいたことを指す。ここから、釈尊の得た真理はその原初状態において言語表現されるべきではないという解釈があった。『摩竭掩室』については僧肇『肇論』「開宗第一」（T45・145b）に採り上げられ、その後広く中国成立の論書・語録等に引用された。また、「言語道断」と組み合わせて論じるのは永明延寿『宗鏡録』巻九四「引証章第三」（『あ・927c』）であるが、道元禪師が『宗鏡録』を批判対象としているかは、現段階では不明。
- (13) 『無門関』序（T48・292b）。訓読は菅原。
- (14) 『新研究』一三頁。
- (15) 「仏語心為宗」の語に関する系譜的研究は、柳幹康『永明延寿と『宗鏡録』の研究』（法蔵館・二〇一五年）の「第二章 四 延寿の論拠」（一一〇〜一二七頁）を参照した。また、金子師は仏語心を文字通りの三態とする一方で、紀平の『解釈』における指摘を受けて、この三つを不可分なる三位一体として見ている。金子師における三位一体という神学的用語の解釈は難解で、門外漢たる筆者の力量では如何

- とも評することが出来ない。
- (16) 『解釈』一三二〜一三三頁参照。
- (17) 『新研究』一三頁。
- (18) 当時、禅籍について禅僧以外の者が云々することは、まだ難しい状況であり、関連書籍にはほぼ必ずといって良いほどに、各著者が禅や禅籍について言葉を発することが、如何に可能になるかが論じられるものであった。
- (19) 『新研究』五九〜六〇頁。なお、本則の登場人物は趙州從諗（七七八〜八九七）であり、南嶽下の南泉普願の法嗣である。本則以外にも、「平常心是道」や「狗子仏性話」などの多くの禅語や問答を残し、公案として学ばれている。
- (20) 『新研究』六一頁。
- (21) 『新研究』六二頁。
- (22) 『新研究』六二頁。
- (23) 『新研究』六三頁。
- (24) 『新研究』一二二頁。本則の登場人物は先に挙げた趙州と、その本師・南泉普願（七四八〜八三四）である。南泉は、南嶽下の馬祖道一の法嗣である。
- (25) 『新研究』一二三頁。
- (26) 『新研究』一二四頁。
- (27) 『新研究』二八〇頁。
- (28) 『新研究』二八二頁。
- (29) 『新研究』一二七頁。
- (30) マーク・R・マリンス著、高崎恵訳『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』（トランスビュー・二〇〇五年）の「第二章・さまざまなキリスト教」（三二〜四六頁）を参照。ただし、同著に金子師のことは採り上げられていない。

**金子師以外で参照した文献**

- ・日本キリスト教団愛知教会編『百年のあゆみ』一九九六年
- ・春見文勝編『禅に生きる傑僧 南天棒』春秋社・一九六三年
- ・西村恵信訳『無門関』岩波文庫・一九九四年
- ・『大正新修大藏経』、引用時には「T」と略記し巻数・頁数・段を付した。

※本論は二〇一五年九月五日に開催された日本宗教学会・第七四回学術大会において発表した内容に、加筆修正を行ったものである。